岐阜新聞真学塾

出題　螢雪ゼミナール

長良北校・築樋拓真

国語を様々な側面からみて、日本語の面白さや深さを知ってもらえればと思います。

問題【国語】

次のA、Bの二つの文は、ともに徒然草の一節です。この二つに共通するメッセージは何か考えてみましょう。

A（弓矢の達人にその道の極意を尋ねたときの答え）
初心の人、二つの矢を持つことなかれ。のちの矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。

B（木登りの達人が弟子に木登りするときの注意を話している場面）
目くるめき、枝危ふきほどは、己が恐れ侍れば申さず。過ちは、やすきところになりて、必ずつかまつることに候ふ。

豆知識 雑学コラム

徒然草の教訓

今日は「徒然草」を見ていきましょう。徒然草は吉田兼好（兼好法師）によって鎌倉時代に書かれた随筆ですね。この徒然草は現在中学校で習う古典の作品の一つで、日本人にとって最も身近な作品の一つと言えます。また、現在だけでなく、江戸時代の学校である寺子屋で教科書として使われていて、時代を超えて、日本の古典の勉強の入り口に使われてきました。

なぜ、長い間、徒然草が日本人の古典入門に使われてきたのでしょうか。理由としては、一つ一つの話が長すぎず読みやすいことや、滑稽な話から自然についてや恋愛論まで様々な話を盛り込んでいることなどがあげられます。そうした中でも一番の理由は、徒然草のなかに時代を超えて通用する教訓が書かれていることだと思われます。では、その教訓を少し見てみましょう。

Aでは、弓矢の極意として、「初心者は矢を2本持ってはいけない。2本持つと、2本目で決めれば良いという油断の心が出てきてしまう。毎回、この1本で決めるという気持ちで臨みなさい。」と書かれています。

一方、Bでは、木登りの極意として、「高さのあまり、目まいがして、枝が細く危ないような高さのところでは、恐る恐る行動するだろうから私から気をつけなさいとは言いません。失敗は、簡単にできると思っているところで必ず起こるのです。」と書かれています。つまり、この二つの話の共通点としては「油断は禁物」ということだとわかりますね。

さて、上の二つの話は現在でも当てはまることではないでしょうか。英語のリスニングで英文が2回読まれるから、1回目は適当に聞いていませんか？また、テストで、高得点の問題は注意深く解くにも関わらず、点数の小さい問題を適当に解いて間違えて思ったより点数が取れていないことがありませんか？ 徒然草の教訓を踏まえて、油断をせずに取り組んでみましょう。

【解答】

油断は禁物